



民俗海左

第175号 令和7 (2025) 年6月発行 ©堺民俗会 Since 1947

下谷佐吉氏遺稿 (4)

イチヨウの伝承

下谷 佐吉

1、生きた化石・イチヨウ

恐竜全盛期のジュラ紀頃(約1億数千年前)イチヨウの仲間も繁茂していたが、氷河期と共に絶滅したと考えられたが、イチヨウの葉の化石は数種類が見つかった。その後、中国で1種類のイチヨウが発見され生きた化石と呼ばれた。

日本のイチヨウは中国への派遣留学僧が仏典や仏像と共に種子を持ち帰り増殖したと云われる。

イチヨウを世界的に有名にしたのは平瀬作五郎で明治29年(1896)、イチヨウの精子の存在を世界で初めて発見したことだった。

2、名前の由来

植物の学名はラテン語で表記し、和名はカタカナで書き、漢字は当て字となっている。イチヨウの名前の由来には三つある。一つは漢字で銀杏と書くのは種子が銀色で外果皮の感じが杏(あんず)に似ているからである。中国語で「ギンアン」と読み、江戸時代の

和漢三才図絵でも「ぎんあん」とある。現在ではイチヨウでギンナンやギンギョウの別名もある。学名はGinkgoと書く。

二つ目は葉の形が鴨の足の水かきに似るので中国名の「鴨脚樹(ヤーチャオ)」をイーチャオと聞き、イチヨウに訛ったとされる。最後はイチヨウの成長が遅く、結実するのに孫の代までかかるので公孫樹の漢字をあてる。

諺に諸説あるが「桃栗3年、柿8年、枇杷の9年は待ちかねる。梅は酸いとして13年、柚の大馬鹿15年、銀杏の気違い30年」と云われる。何事も時期が来なければ達成されないことをいう。今は接ぎ木をして5年程で結実する。

なお、万葉集ではイチヨウを「ちち」として詠まれている。

ちちの実のちちの命(みこと)ははそ葉の母の命・・・(巻19、4164 大伴家持)

ちちの実乳の実で乳房状の気根が出るイチヨウと解され、チチノキの別名がある。

3、イチヨウの善し悪しと用途

ギンナンの実は煮たり焼いたりして食用にする。ギンナンはかぶれたり、食べすぎると痙攣や中毒を起こすことがある。また、ギン

ナンは薬用として用いられ、咳止め、去痰、滋養強壮、下痢、呼吸困難に効能があると云われる。

バスガイドは「街路樹のイチヨウは、東京都では雄の木を植えているので、実が成らず、悪臭の心配はありません。大阪の御堂筋の街路樹のイチヨウは雌を植えたため、ギンナンの収穫は出来るけれど悪臭が漂う」と説明された。

葉は扇形で末広がりの縁起物とされ、防虫効果もあり、本のしおりにした。材は黄白色、緻密で美しいから彫刻材、木魚、まな板、碁盤、ソロバン玉等に使われる。

4、イチヨウへの信仰

【ラッパイチヨウ】

伊勢街道の御杖村を歩き、春日神社に立ち寄った時、イチヨウがあり、扇形の、丸く筒状になったラッパ状の落葉を数枚見つけた。ラッパイチヨウを他の人にも声をかけた。

【お葉つきイチヨウ】

米原市の醒ヶ井へバイカモ(梅の花に似た水中花)を見に行くと、了徳寺に国の天然記念物のお葉つきイチヨウがあった。宇陀市の額井岳の登山口にある戒長寺のお葉つきイチヨウも国の天然記念

津川と船場・島之内をつなぐ天下の台所・大坂の大動脈でした。今回はこの長堀川の西側を巡りました。

・木村兼葎堂邸宅跡地碑と顕彰板
木村兼葎堂（1736～1802）は堀江の裕福な酒造家の長子。本草学（博物学）・書画・著作・詩作に精通しまた多方面にわたるコレクションも残しており、蔵書は昌平坂学問所を経て現在は内閣文庫に、鉱物や貝類の標本は、大阪市立自然史博物館に収蔵されています。彼の名は博学多芸の代名詞で、邸は知識人が交流する文化人のサロンとなり、日記には述べ9万人もの来訪者が記録されています。まさに「なにわの知の巨人」でした。

・土佐藩大坂蔵屋敷跡
長堀川の完工と同時期に、川沿いの白髪町に土佐藩が広大な蔵屋敷を置き、米、材木、鯉節、和紙、砂糖などの特産品を蔵物として大坂に運び込み、売捌いていました。

・土佐稲荷神社

（三菱財閥創業の地）

土佐藩蔵屋敷の鎮守社。廃藩置県後岩崎弥太郎が土佐藩の負債を

肩代わりする条件で蔵屋敷と船三隻を無償で入手、これを元手に海運業を始めました。1873（明治6）年に「三菱商会（日本郵船の前身）」と改称、1874（明治7）年に本社を東京に移します。1900（明治33）年、中之島に大阪支店として移転した際に、土佐稲荷神社以外のこの地を大阪府に譲渡しました。なお当神社は1868（慶応5）年の堺事件幕引きの舞台になった所です

・鯉座橋跡、別名土佐殿橋
1622年架橋。左岸に土佐藩蔵屋敷、右岸に鯉座（鯉節問屋）があったことが名の由来です。鯉節は、土佐・薩摩・阿波・紀伊・



四ツ橋跡碑

伊予・駿河・伊豆・相模・安房・上総・奥州等が産地でした。

・大阪木材市売市場発祥の地
大阪に集まる木材を迅速に売捌くため、土佐藩から幕府に願い出て、市売市場が許可されました。市売りとはセリによって販売する方式で、大阪において初めて行われたと言われています。

・あみだ池大黒
1805年創業。初代小林林之介は長堀川に停泊する船の底に貯まる余剰米を買い取って原料とし、おこし作りを始めました。大黒様3500体を集めた蔵があります。

・四ツ橋跡
長堀川と西横堀川の交差部の東に「炭屋橋」、西に「吉野家橋」、北に「上繫橋」、南に「下繫橋」が井の形に架かっていましたが、架橋時期は不明です。両堀川の埋め立てで1970年には全て撤去されました。（以上）

（本稿は例会時に配布された資料から要点を抜粋編集したものです。文責は編集者佐原浩二にあります。）

左海民俗 第一七四号

令和7（2025）年6月

発行人 佐原 浩二

編集者 佐原浩二・一色若夫

印刷所 (株)アイティ印刷

ブログ

<https://ameblo.jp/skmz2014>

年会費 4000円

郵便振替 0093007-317576